

中興の祖 酒井忠徳と庄内藩校致道館

⑧

開校から約70年間、多くの逸材を輩出した致道館は、明治維新という大きな時代の転換に伴い廃校となりました。建物には苗秀学校、県庁舎や警察署などに転用されますが、致道館の扁額や祭器などは旧藩主酒井家へ移されました。

この時、聖廟に祀るために描かれたはずの孔子像と顔淵像は、長く人目に触れ

る機会を失います。再び公開になったのは、国指定史跡となった致道館が再整備された昭和40年代のこと。以後、今日まで50年以上の間、二人の肖像は「取り違え」られてきました。学問の神として崇めてきた二人

担当の藩士は黒崎廉(与八)と塙伊助の二人です。模写は、孔子半身像を画工の渡辺又蔵に、顔淵像は何と谷文晁に依頼しました。

孔子半身像【写真1】の制作は、享和元(1801)年3月6日、黒崎が湯島聖

堂の林大学頭に模写の申請をしたことに始まります。同月許可を受けて、翌4月2日、黒崎と塙が渡辺又蔵を伴って聖堂へ行き、「仮写し」をさせました。その後、忠徳らに了承を得て同月25日に清書にとりかかり、28日に完成します。東都(江戸)で表装し、庄内へ送りました。なお、「仮写し」の画も未表装のまま現存しており(個人蔵)、清書の

孔子像と顔淵像、取り違え事件?の顛末

を取り違えるなんて、俄には信じられませぬね。特に孔子像は、インパクトのあるお顔ですし……。

今回は、ちょっと長い話になりますが、大事な神様のことです。最後まで読み進めてくださいますよう、お願いいたします。

致道館設立に際し、庄内藩では湯島聖堂にある像を、許可を得て模写しました。



本画とはほぼ一致しています。一方で、顔淵像【写真2】の制作も同様に、湯島聖堂より許可を受け、同年5月15日、谷文晁が模写しました。文晁は詩人谷麓谷の子で、父子揃って田安德川家に仕えています。田安家は、忠徳の妻脩姫の実家ですから、このコネで文晁に依頼したのでしょう。文晁39歳

の時でした。こちらも表装をして、完成品を庄内へ送りました。この二つの画像は、それぞれ大きさの異なる桐箱に収納されています。木材の色味、金具、紐などから、同時期に制作された箱だと推定しています。

【写真2】谷文晁模写「顔淵像」。長らく「作者は不明だが、高名な画家の孔子像」と考えられてきたもの

【写真1】渡辺又蔵模写「先聖半身像」(孔子半身像)。長い間「顔淵像」と紹介されていたもの

黒崎は、制作の過程や関係先とのやりとりを「聖師像御写来歴之記」として、記録に残しています。「聖師像」、つまり「先聖(孔子)、先師(顔淵)の像」については、些細なこともま

で記しており、ほうぼう手を尽くした労作であることが伝わってきます。ところが、制作関係者の努力むなしく、「名画の孔子像なるもの」が、庄内から発見されたという知らせが届き、事態は急展開したのです。

致道博物館主任学芸員・佐藤淳